

総合的な学習の時間における表現力を育成する指導の工夫

— 「論理的な思考」を活用し、教科で学んだ表現方法の選択を通して —

大崎上島町立東野小学校 高橋 勝海

研究の要約

本研究は、総合的な学習の時間における「まとめ・表現」の過程で、「論理的な思考」を活用し、教科で学んだ表現方法の選択をさせる工夫について考察したものである。文献研究から、総合的な学習の時間における表現力を、目的意識や相手意識をもち、教科で学んだ表現方法を選択して活用する力と整理した。目的意識や相手意識、表現方法の特徴や他者からのアドバイス等の根拠を基に、「論理的な思考」を取り入れることで、よりよい表現方法の選択ができると考えた。表現方法を選択する手法として、「トゥールミンの議論モデル」を参考に「自己モニター」を取り入れたモデルを考案した。表現方法の選択の場面で「論理的な思考」の構造を取り入れたワークシートを使用した。その結果、複数の「根拠」に基づいた「理由付け」や「自己モニター」を行うことで、よりよい表現方法の選択を行うことができた。これらの指導は、表現力の育成に有効であることが分かった。

キーワード：「論理的な思考」 教科で学んだ表現方法 「自己モニター」

I 主題設定の理由

教育課程企画特別部会論点整理（平成27年）（以下「論点整理」とする。）において、「育成する資質・能力の基本的な考え方」では、教育基本法が目指す教育の目的を踏まえつつ、社会の質的变化等を踏まえた現代的な課題に即して、これからの時代は「他者に対して自分の考え等を根拠とともに明確に説明しながら、対話や議論を通じて多様な相手の考えを理解したり自分の考え方を広げたりし、多様な人々と協働していくことができる人間であること」¹⁾と示している。

また、田村学(2015)は、社会の急激な変化の中で、思考を伴うものや他者と話し合ったり情報交換したりして、新しいアイデアを生み出し創造するようなスキルが今後求められるスキルであると述べている。その上で、未来社会に生きる子供に必要な学力として、単に知識を暗記し再生すればよいのではなく、論理的に考えたり他者に分かりやすく表現したりする実社会で活用できる能力、つまり汎用的能力が求められると述べている⁽¹⁾。

広島県教育委員会においても、広島版「学びの変革」アクション・プラン（平成26年）を打ち出し、これからの社会で活躍するために必要な資質・能力の育成を目指した教育を推進していくため、児童生徒

の主体的な学びを促す「課題発見・解決学習」や「異文化間協働活動」を積極的に取り入れ、自ら深く考え、自分の言葉で自分自身や広島・日本のことを語ることのできる自立した人材や、多様性を受け入れ、自信をもって異なる文化の人とコミュニケーションを取ることのできる人材の育成を目指している。

県の施策を受け、所属校のある大崎上島町では、大崎上島の将来を担う、たくましく生きぬく子供の育成を目標とした、大崎上島町教育推進プランにおける「大崎上島学」を基盤に、年間を通じて特色ある教育を総合的な学習の時間で行っている。「大崎上島学」においては、ふるさと大崎上島について学ぶことによって地域のすばらしさに気付かせ、地域を誇りに思う心を育てることをねらいとし、各地区のすばらしさを、島内にある三つの小学校において、交流し合うという活動を行っている。

そのような取組が、町全体で進められているが、所属校の総合的な学習の時間に係る児童対象校内アンケート調査からは、学校で定義しているコンピテンシーの一つである「豊かな表現力」において、「考えの根拠を明らかにし、表現すること」に課題が見られた。その原因として、所属校においては様々な表現方法を活用して表現する場の設定が十分とはいえない現状があったからだと考える。

そこで、本研究においては、総合的な学習の時間の「まとめ・表現」の過程において、「論理的な思考」を活用し、教科で学んだ表現方法を選択するための指導を工夫すれば、表現力を育成することができると考え、本主題を設定した。

Ⅱ 研究の基本的な考え方

1 総合的な学習の時間における表現力とは

小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編（平成20年、以下「解説」とする。）では、「まとめ・表現」の過程において、「情報の整理・分析を行った後、それを他者に伝えたり、自分自身の考えとしてまとめたりする学習活動を行う。」²⁾と示している。その学習活動の中で配慮することとして、相手意識や目的意識を明確にしてまとめたり、表現したりすることを取り上げている。

また、「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）」（平成22年）には、総合的な学習の時間における表現において、①相手意識や目的意識を明確にすること、②伝えるための具体的な方法を身に付け、内容を明らかにすること、③各教科で身に付けた表現方法を積極的に活用することに配慮することが大切であると示している。

そこで本研究の総合的な学習の時間における表現力とは、情報を整理・分析した後、相手意識や目的意識をもち、各教科で学んだ表現方法を選択し表現する力と考える。

2 「論理的な思考」を活用し、教科で学んだ表現方法の選択を通してとは

(1) 「論理的な思考」とは

福澤一吉（2015）は、論理的に説明する議論のルールとして、「トゥールミンの議論モデル」（1958）を図1のように示している。福澤は、自分の言いたい「主張」や結論を、「根拠（証拠）」によって裏付けようとする行為、または「主張」、結論になる理由を述べることを一般に「論証」と呼ぶと述べている。

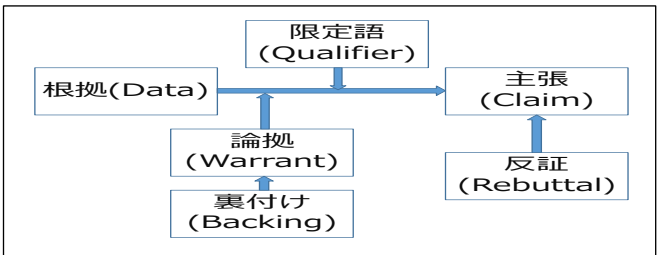


図1 「トゥールミンの議論モデル」

「トゥールミンの議論モデル」の説明等を、表1において示す。

表1 「トゥールミンの議論モデル」の説明と具体例

	説明	具体例
主張	根拠からなんらかの飛躍をして出された結論や判断。先行するなんらかの主張に対する反論。簡単には、言いたいことを中心部分。	彼は英国人だろう
根拠	主張を導く基になる証拠、事実及び論拠を合わせたもの。より狭い意味では経験的事実。	ハリーはバミューダで生まれた
論拠	主張と根拠を結合させる役目をする。	なぜなら、バミューダで生まれた者は英国人になるから
限定語	論拠の確かさの程度を示す語。	だから、多分
裏付け	その議論がどの程度信憑性があるのか証明するもの。	英国領で生まれた人の国籍に関する法律によってそのように定められているから
反証	論拠の効力に関する保留条件。	彼の両親がともに外国人であったり、彼自身がアメリカに帰化したのではない限りは

井上尚美（2007）は、「主張」「根拠」「理由付け」のみからなる「三段論法」の場合により、図1に示すような「トゥールミンの議論モデル」であれば、はつきりと各部分の関係が分かり、不完全な推論の際にも各項目のどこに弱点があったかが明らかになると述べている⁽²⁾。

その一方で、小学校中学年段階では、議論や論証の型として「三段論法」の構造で十分だろうとも述べている。このため、本研究では、児童の発達段階を考慮し「三段論法」を用いることとする。

さらに、児童に対する指導について、思考の過程のモデルを強調すると、児童は自分の考え方そのものに気を取られてしまうので、モニター機能を導入することで、思考の固定化に陥らないことが期待されると述べている。

これらのことから、「論理的な思考」とは、「根拠」に基づいた「主張」に対して「理由付け」を行うものとし、その後、モニターを導入するものとする。

(2) 「論理的な思考」を活用するとは

授業において「根拠」と「主張」「理由付け」に着目した展開を行うために、福澤（2015）の「トゥールミンの議論モデル」を基に、（1）で述べた「論理的な思考」を活用したモデルを考案し、図2に示す。

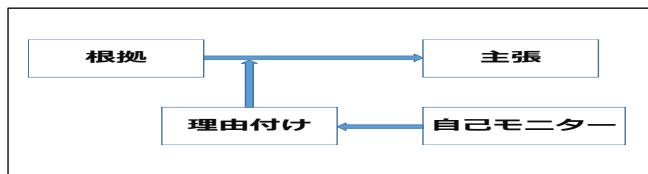


図2 研究におけるモデル

図2に示す「論理的な思考」の過程において、児童が「主張」をする際、複数の「根拠」を関連付けて「主張」に対する「理由付け」を行い、その「理由付け」に対するモニター機能として「自己モニター」をすることで、「主張」をより明確にすることができると考えた。次に、本モデルにおける、それぞれの項目について述べる。

「主張」とは、福澤（2015）が述べているように、自分の一番言いたいこと（結論）である。本研究においては、体験活動や聞き取り調査などで集めた情報を伝えるために、「伝える内容」や「表現方法の特徴」「伝える相手の特徴」「ゲストによるアドバイス」によって選択した表現方法を「主張」とする。

「根拠」とは「主張」を述べるための「理由付け」の要素となっているものであり、本研究においては、表現方法を選択する際の「理由付け」の要素を、次のとおりとする。

根拠A：伝える内容
根拠B：表現方法の特徴
根拠C：伝える相手の特徴
根拠D：ゲストによるアドバイス

「理由付け」とは、「主張」と「根拠」とを論理的に結ぶ役目をするものであり、本研究においては、表現方法を選択した際、複数の根拠を意識した自分の考えの説明を「理由付け」とする。

さらに、本研究においては、「理由付け」に対する「自己モニター」を取り入れる。ただし、井上（2007）は、児童が自分自身の考えをモニターし、別の見方・考え方がないかと視点の転換を図るような能力は、小学校中学年以上でないと無理だと述べている。よって、本研究においては、発達段階を考慮し、児童が円滑に「自己モニター」ができるようになるため

に、その前段階として、他の児童の「理由付け」に対する「他者へのモニター」を取り入れることが有効であると考え、「自己モニター」へと発展させるための「他者へのモニター」を設定した。

これらのことから、「論理的な思考」を活用するとは、「トゥールミンの議論モデル」を参考に、「主張」である表現方法を選択する学習活動において、「論理的な思考」に「自己モニター」を取り入れることとする。

(3) 教科で学んだ表現方法とは

「解説」では、総合的な学習の時間の学習指導における配慮事項として「まとめ・表現」の過程において、伝えるための具体的な方法の例に、作文やポスター、プレゼンテーションソフトなどの手法を挙げている。

また、各教科で獲得した表現方法を積極的に活用することが考えられると示し、文章表現だけでなく、絵画や音楽を使ったり、それらを組み合わせたりする総合表現も考えられると示している。

そこで、小学校学習指導要領（平成20年）から、各教科の表現方法に関する項目を抜き出し、整理したものを次頁表2に示す。

これらを、教科で学んだ表現方法とする。

(4) 教科で学んだ表現方法を選択するとは

「解説」では、「まとめ・表現」の過程において配慮すること、誰に伝え、何のためにまとめるのかによって、まとめや表現の方法は変わり、児童の思考の方向性も変わると示し「相手を意識して、伝えたいことを論理的に表現することで、自分の考えは一層確かになっていく」³⁾と示している。

このことから、教科で学んだ表現方法を選択するとは、「まとめ・表現」の過程において、目的や相手に応じ、次頁表2に示す中から表現方法を選択することとする。

さらに、この選択の場面において、「論理的な思考」を活用し、目的意識や相手意識、表現方法の特徴や、ゲストからのアドバイスを意識させ、「理由付け」を行いながら、教科で学んだ表現方法を選択していくこととする。その構想図を次頁図3に示す。

児童がテーマに応じた、伝える内容を設定した後、「主張」である表現方法の選択を行う。「主張」に対して、複数の「根拠」を関連付けた「理由付け」をし、その後「他者へのモニター」や「自己モニター」を行うことで、よりよい表現方法を選択していく。

このような過程を通して、表現方法を選択していくことにより、表現力の育成ができると考えた。

表2 各教科で学んだ表現方法一覧

教科	教科で学んだ表現方法（「○」の中は学年）	活用可能な表現方法	教科	教科で学んだ表現方法（「○」の中は学年）	活用可能な表現方法
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・事物の説明や経験の報告。①② ・グループで話し合って考えを一つにまとめる。①② ・知らせたいことなど、身近な人に紹介する。①② ・想像したことを文章に書く。①② ・経験したことを報告する文章や観察したことを記録する文章を書く。①② ・身近な事物を簡単に説明する文章などを書く。①② ・紹介したいことをメモにまとめたり、文章に書いたりする。①② ・伝えたいことを簡単な手紙に書く。①② ・物語を演じる。①② ・相手や目的に応じ調べたことなどについて、筋道を立てて話す。③④ ・工夫しながら話す。③④ ・要点をメモする。③④ ・理由や事例などを挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話す。③④ ・出来事の説明や調査の報告をする。③④ ・身近なことを想像したことを基に、詩をつくったり、物語を書いたりする。③④ ・疑問に思ったことを調べて、報告する文章を書いたり、学級新聞などに表したりする。③④ ・収集した資料を効果的に使い、説明する文章などを書く。③④ ・目的に合わせて依頼状、案内状、札状などの手紙を書く。③④ ・ローマ字で書く。③④ 	感想文 報告文 事実 観察記録 説明文 メモ 手紙 動作化 要点 メモ 詩 物語 学級新聞 依頼状 案内状 札状 ローマ字	算数	<ul style="list-style-type: none"> ・具体物を用いた活動などを通して、数量やその関係を言葉、数、式、図などに表す。①② ・数の系列を作ったり、数直線の上に表したりする。①② ・ものの個数を絵や図などを用いて表す。①② ・具体物をまとめて数えたり等分したりし、それを整理して表す。①② ・計算の意味や計算の仕方を、具体物を用いたり、言葉、数、式、図を用いたりして表す。①② ・身の回りにある数量を分類整理し、簡単な表やグラフを用いて表す。② ・正方形、長方形、直角三角形をかく。② ・数量やその関係を言葉、数、式、図、表やグラフを用いて分かりやすく表す。③④ ・数量の関係を式に表す。③④ ・数量を□を用いて表し、関係を式に表す。③④ ・数直線を用いて表す。③④ ・コンパスを用いて作図をする。③ ・表を用いて表す。③ ・変化の様子を折れ線グラフを用いて表す。④ ・見取り図や展開図をかく。④ 	数式 図 数直線 絵 表 グラフ 式 作図 見取り図 展開図
			音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・歌唱、暗唱、演奏、音楽づくり。①②③④ ・想像したことや感じ取ったことを言葉で表す。①②③④ ・様々な発想をもって即興的に表現する。③④ 	歌唱 演奏 音づくり
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・観察、調査したことを、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、調べたことや考えたことを表現する。③④ ・白地図や年表にまとめる。③④ 	地図 白地図 年表	図画工作	<ul style="list-style-type: none"> ・思い付いてつくること。①② ・体全体を動かしてつくること。①② ・絵や立体、工作に表す。①② ・表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表現に適した方法などを組み合わせて表す。③④ 	絵 立体 工作
理科	・観察、実験。③④	観察記録 実験	工作		
生活	・気付いたことや楽しかったことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの方法で表す。①②	言葉 絵 動作化 劇化	体育	・踊ること。（全身で。リズムに乗って。特徴を捉えて。組み合わせたり、繰り返したりして。）①②③④	踊る 身体表現

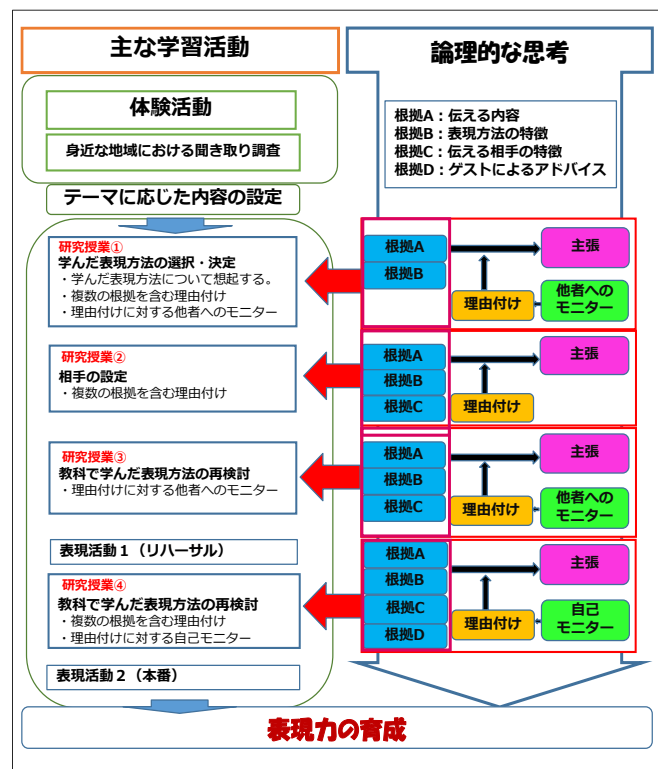


図3 研究における構想図

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

総合的な学習の時間における「まとめ・表現」の過程において、「論理的な思考」を活用し、目的意識や相手意識、表現方法の特徴、他者からのアドバイスを意識して、表現方法を選択する指導の工夫を行い、児童自らが「理由付け」に対して「自己モニター」を行えば、児童に表現力を育成することができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表3に示す。

表3 検証の視点と方法

検証の視点	方法
「論理的な思考」を活用し、表現方法を選択することができたか。	研究授業①～④のワークシートの記述。

IV 研究授業の内容

- 期 間 平成28年6月22日～平成28年7月12日
- 対 象 所属校第4学年（13人）
- 単元名 海の魅力を伝えよう
- 目 標

大崎上島の自然に関わる活動を通して、地域の自然や、自然に関わる人々の思いや願いを知るとともに、それらを大切に、自分たちにできることを実践していこうとすることができる。

○ 研究授業の概要

本研究にかかわる指導計画を次頁図5、研究授業①～④の概要を次頁表6に示す。

V 研究授業の分析と考察

1 「論理的な思考」を活用し「根拠」を基にして表現方法を選択することができたか

(1) 全体の傾向について

「まとめ・表現」の過程において、児童は、大崎上島の海の魅力を伝えるために、伝える内容と表現方法を選択した。

研究授業①で選択した表現方法について、研究授業④では、9人の児童が見直しを行った。児童が研究授業④で最終的に選択した伝える内容と表現方法を表4に示す。

表4 児童が選択した伝える内容と表現方法

チ ーム	伝える内容	表現方法
昔 の 海	○昔の海の様子 海の変化 船の乗り方 海の生き物	○プレゼンテーション(ローマ字) ・年表(写真) ・年表(写真・絵) ・写真
ス ナ メ リ	○スナメリグジラについて 食べ物 名前の由来 鳴き声 習性と生息状況 オスとメスの見分け方	○プレゼンテーション(ローマ字) ・クイズ、写真 ・クイズ、写真 ・クイズ、音作り ・クイズ、地図、動画 ・クイズ、写真
海 の 遊 び	○海での遊び スイカ割 魚釣り 貝殻遊び 環境問題	○劇 ・動き ・動き、絵 ・工作(プレゼント作り) ・動き、絵

複数の「根拠」を基にして「理由付け」ができるような指導の工夫を行ったことにより、「根拠」を基にした表現方法の選択をすることができた。これらの

研究授業におけるワークシートの記述から、全体の傾向について「根拠」を基にした「理由付け」ができた児童の数（延べ数）を図4に示す。

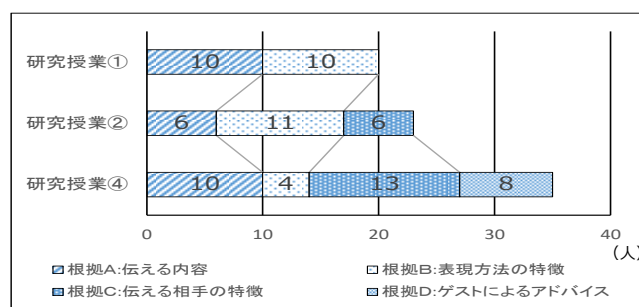


図4 「根拠」を基にした「理由付け」ができた児童の数

図4に示すとおり、研究授業①から徐々に、クラス全体の児童が書いた「理由付け」の記述の数（延べ数）は増加しており、複数の「根拠」を基にした「理由付け」ができたことから、効果的な表現方法の選択ができたのではないかと考える。研究授業④での児童の「理由付け」の記述を表5に示す。

表5 研究授業④における児童が記述した「理由付け」

- ・僕の伝えたいことは、昔の海の遊びは楽しいということ。（根拠A：伝える内容）
- ・動きをみると大体の様子が分かるし、それからスクリーンに英語を表すとどんなことをやっているか具体的に分かるから。（根拠B：表現方法の特徴、根拠C：伝える相手の特徴）
- ・相手は、日本語があまり分からない外国の人だから、ローマ字を付けてプレゼンテーションにしました。（根拠C：伝える相手の特徴、根拠D：ゲストによるアドバイス）
- ・大串海岸のことが知りたいと書いてあったので、地図で表しローマ字を書く（説明）と分かりやすい。（根拠D：ゲストによるアドバイス、根拠C：伝える相手の特徴）

なお、研究授業①と②を比較すると、「根拠B：表現方法の特徴」は増えているが、「根拠A：伝える内容」については減少している。それは、新たに「根拠」として提示した「根拠C：伝える相手の特徴」が加わることで、「根拠A：伝える内容」と「根拠B：表現方法の特徴」に対する意識がされなかったからではないかと考える。

また、研究授業②から④の結果からも同様に、新たに「根拠」が提示されると、掲示物のみの「根拠B：表現方法の特徴」に対しては、意識されにくくなったことから「根拠」に対する記述が減少したもののと思われる。

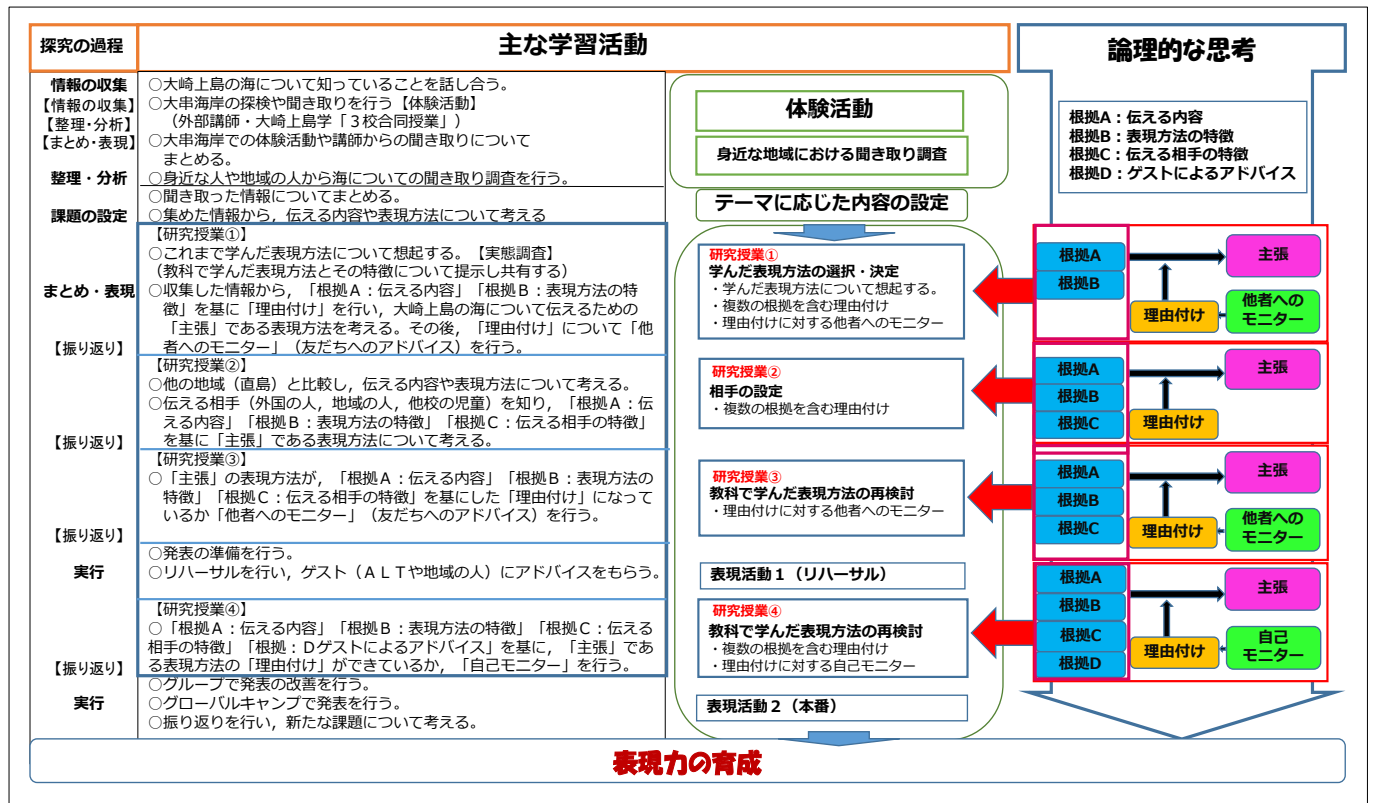


図5 本研究に関わる指導計画

表6 研究授業の概要

	研究授業①【実態調査】	研究授業②	研究授業③	研究授業④
ねらい	大崎上島の海のことについて、整理した情報から、伝えたい表現方法を考えることができる。	大崎上島の海の魅力を発信するために、集めた情報を相手や目的に応じて、効果的に表現する方法を考え、理由付けをすることができる。	大崎上島の海の魅力を発信するために、集めた情報を相手や目的に応じて、効果的に表現する方法を選択することができる。	大崎上島の海の魅力をどのような方法で表現すると効果的なのか、相手意識や目的意識をもち、表現する方法を選択修正することができる。
学習の展開	1 既習の想起 2 課題の確認 伝える方法について考えよう。 3 どんな方法で紹介できるか考える。【実態調査】 4 「論理的な思考」の仕方について知る。 5 表現方法を選択し、理由を考える。 6 選択した表現方法について「他者へのモニター」を行う。 7 振り返りを行う。 8 まとめをする。	1 既習の想起 2 大崎上島と他の島を比べる。 3 伝える相手の特徴を知る。 4 課題の確認 伝えることが外国の人によく分かるような方法を考えよう。 5 表現方法を決める。 6 相手意識をもち「理由付け」をワークシートに書く。 7 選んだ表現方法と理由を発表する。 8 振り返りを行う。 9 まとめをする。	1 既習の想起 2 課題の確認 外国の人に伝わるような方法になっているか考えよう。 3 相手意識をもち表現方法について確認する。 4 モニターのポイントを確認する。 5 表現方法や整理した考え方について「他者へのモニター」を行う。 6 グループで表現方法を決める。 7 振り返りを行う。 8 まとめをする。	1 既習の想起 2 課題の確認 外国の人に伝わるような方法になっているかを見直そう。 3 「論理的な思考」の流れについて確認する。 4 表現方法の修正案を考える。 5 アドバイスを受け再検討し、自分の考えた「理由付け」について「自己モニター」を行い再検討する。 6 再検討した表現方法についてワークシートに書く。 7 まとめをする。
主張	伝える方法	伝える方法	伝える方法	伝える方法
根拠	A：伝える内容 B：表現方法の特徴	A：伝える内容 B：表現方法の特徴 C：伝える相手の特徴	A：伝える内容 B：表現方法の特徴 C：伝える相手の特徴	A：伝える内容 B：表現方法の特徴 C：伝える相手の特徴 D：ゲストによるアドバイス
理由付け	A・B	A・B・C	A・B・C	A・B・C・D
モニター	友だちの理由付けに対して		友だちの理由付けに対して	自分の見直した理由付けに対して

そこで、研究授業④では、新たに加わった「根拠D：ゲストによるアドバイス」を提示する際、「根拠A：伝える内容」や「根拠C：伝える相手の特徴」を十分意識させるために、「論理的な思考」の構造を視覚的に理解できるような板書で示し、ワークシートを構造化した。このことにより、研究授業②で減少した「根拠A：伝える内容」や「根拠C：伝える相手の特徴」が増加する効果が表れたと考える。

(2) 個の変容について

授業を進めていく上で「理由付け」の記述に変化が見られた児童について考察する。

研究授業①において児童aは、海の遊びの楽しさを伝えるために短歌と紙芝居という表現方法を選択していた。しかし、「根拠」を基にした選択ではなく、これは、伝える内容や表現方法の特徴を明確にできていなかったことが考えられる。

研究授業②において児童aは、表現方法にポスターを選択した。「理由付け」として、伝える相手の特徴が明確になったことが考えられる。外国の人に対して、伝える内容を紹介するために、言葉ではなく視覚的に表現するものがよいという、伝える相手の特徴に応じた「根拠」に対して考えたからである。自分たちが表現する相手の詳細について知ることにより、表現方法を選択する際に、意識させる手立てとなったのではないかと考える。

	根拠A 伝える内容	根拠B 表現方法の 特徴	根拠C 伝える相手 の特徴	根拠D ゲストによる アドバイス
研究授業①				
研究授業②		○	○	
研究授業④	○		○	○

図6 児童aの「根拠」を基にした「理由付け」の記述の内容

表7 児童aが記述した「理由付け」の内容

	「理由付け」の記述
①	みんなが覚えやすいから 楽しく伝えられるから
②	ポスターを選んだ理由は絵を見ただけで分かる（根拠B：表現方法の特徴）し、ポスターに大きく字を書くと（外国の人にも）（根拠C：伝える相手の特徴）分かりやすいから
④	伝えたいことは昔の遊びです。（根拠A：伝える内容）伝えたい相手は外国の人です。（根拠C：伝える相手の特徴）言葉がはっきり伝わるように、動きをきびきびします。（根拠D：ゲストによるアドバイス）

図6に示すように、児童aは研究授業①では、表現方法を選択できていたが、「根拠A：伝える内容」

「根拠B：表現方法の特徴」を意識したものではなかった。研究授業②では、「根拠B：表現方法の特徴」及び「根拠C：伝える相手の特徴」を基にした表現方法の選択ができた。

表7は児童aの「理由付け」の記述内容である。表7に示すとおり、研究授業④では複数の「根拠」を基にして表現方法を選択することができた。

児童aにとって、「根拠C：伝える相手の特徴」が明確になったことで、表現方法の特徴を基に、相手に適した表現方法の選択ができたと考える。特に研究授業④においては、「主張」である表現方法と「根拠」とが構造的につながったワークシートを作成し、考え方を確認することを行うことで、「根拠」を明確にした「理由付け」に対する記述ができたと考える。

このことから、「論理的な思考」の過程を明確にしたワークシートを活用したことで、「根拠」を基に「理由付け」を行い、よりよい表現方法の選択ができたと考える。

2 「論理的な思考」の「モニター」は表現方法の選択に効果的だったか

研究授業におけるワークシートの記述から、「理由付け」に対して行った「モニター」の全体の傾向について図7に示す。

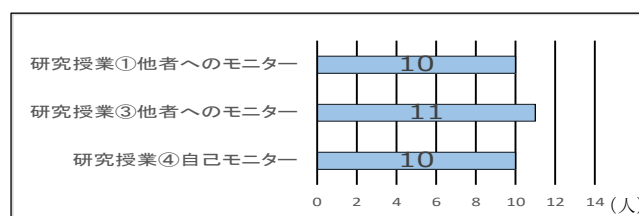


図7 研究授業において、モニターができた人数

研究授業①と③では、「他者へのモニター」を行い、研究授業④では「自己モニター」を行った。「モニター」ができた人数を図7に示す。

児童は「他者へのモニター」を行うことにより、他者の「理由付け」から多様な考えを知ることができた。また、「他者へのモニター」を通して、「理由付け」が適切かどうかを確認する視点を得たことは、次の段階で「自己モニター」を行う上で有効であったと考える。さらには、他者から「モニター」をしてもらうことで、自分が考えた「主張」である「表現方法」について見直すこともできた。

研究授業④では、10人の児童が「自己モニター」を行うことができ、「自己モニター」を行う際の視点も、複数の「根拠」に基づいて行っていた児童が10人

中、8人であった。表8には、研究授業④における、「根拠」AからBに基づいた「理由付け」と「自己モニター」ができたかを表している。

表8 研究授業④における「自己モニター」及び「理由付け」に各「根拠」を書いた数

	根拠A 伝える 内容	根拠B 表現方法 の特徴	根拠C 伝える 相手の特徴	根拠D ゲストによる アドバイス
理由付け	10	4	13	8
自己モニター	0	6	10	2

「自己モニター」ができた10人の児童の記述の主なものは、「根拠C：伝える相手の特徴」であった。伝える相手が、外国の人であるということから、児童も特徴を考えることができたのではないかと考える。

また、研究授業③において、他者からのモニターを受け、再度研究授業④において「自己モニター」をすることで、9人の児童が「主張」である表現方法を見直すことができ、よりよい表現方法を選択できた。

研究授業④においては、「理由付け」の内容について「自己モニター」を行った後、自分の考えが記述できない児童がいた。個別に確認を行ったところ、児童は口頭で自分の考えを説明することはできた。「自己モニター」を行う際の手順や、記述の仕方のモデルを示しながら、繰り返し活動を行ったり指導を丁寧に行ったりする必要があると考える。

これらのことから、本研究における「まとめ・表現」の過程において、「根拠A：伝える内容」や「根拠B：表現方法の特徴」について「自己モニター」を行ったことで、「主張」に対する「理由付け」が適正かどうかを確かめ、「主張」であるよりよい表現方法を選択することができたと考える。このことから、「自己モニター」を「論理的な思考」に組み込んだことは、表現方法を選択する上で効果的な活動であったと考えられる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

総合的な学習の時間における「まとめ・表現」の過程において、「論理的な思考」を活用し、「根拠A：伝える内容」や「根拠B：表現方法の特徴」「根拠C：伝える相手の特徴」「根拠D：ゲストによるアドバイス」を意識して「自己モニター」を行い、表現方法を選択する指導の工夫を行った。このことにより、

児童自らが複数の「根拠」に基づいた、「理由付け」や「自己モニター」を行うことで、よりよい表現方法の選択を行うことができることが分かった。

2 研究の課題

「論理的な思考」を活用し、表現方法の選択を行う際、「根拠」である「伝える内容」や「表現方法の特徴」が児童に十分に意識されていなかった。

その要因として、「伝える内容」については、児童自身が十分な情報収集を行うことができていないことや、児童自身が「伝える内容」について十分検討を行わなかったことから、児童自身に「海の魅力」に対する強い思いや願いを、もたせることができなかったことと考える。また、「表現方法の特徴」については、単元導入時に児童自身に表現方法を書き出す活動を行い、その後、既習の表現方法についての情報の共有を図った。表現方法については、掲示物等で意識させることはできたが、その特徴について明記していなかったことから意識付けを行うことができなかったと考える。

このことから、教師自身が地域に出かけ、多様な人・もの・ことと出会い、十分な情報源をもつことが必要であると考えた。また、児童に十分な情報収集を行う場を設定することや児童が表現方法を活用できるよう意識付けるためには、掲示物等で可視化し、繰り返し掲示することが必要と思われる。さらに、今後、表現方法を選択する際には、その方法がどのような教科や場で活用されているのか、どのような相手に対して有効であるのか等、特徴を具体的に示すことを行うことにより、表現力を一層高めていくようにする。

【注】

- (1) 詳細は、田村学（2015）：『授業を磨く』東洋館出版社 pp. 8-11を参照されたい。
- (2) 詳細は、井上尚美（2007）：『思考力育成への方略』明治図書p. 84を参照されたい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成27年）：『教育課程企画特別部会論点整理』p. 6
- 2) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』東洋館出版社p. 90
- 3) 文部科学省（平成20年）：前掲p. 84

【参考文献】

- 福澤一吉（2002）：『議論のレッスン』NHK出版
 田村学（2015）：『授業を磨く』東洋館出版社
 井上尚美（2007）：『思考力育成への方略』明治図書